

論 説

## 新型コロナウイルス感染症による大学生活への影響： 大学生は Before コロナに戻ることができるのか？

折 戸 洋 子 (産業マネジメント学科)  
崔 英 靖 (産業マネジメント学科)  
岡 本 隆 (産業マネジメント学科)  
岡 本 直 之 (産業マネジメント学科)  
曾 我 亘 由 (産業マネジメント学科)  
橋 惠 昭 (産業マネジメント学科)

A questionnaire survey on the impact of COVID-19 on university students:  
Can university students return to life before COVID-19?

Yohko ORITO (Industrial Management)  
Hidenobu SAI (Industrial Management)  
Takashi OKAMOTO (Industrial Management)  
Tadayuki OKAMOTO (Industrial Management)  
Nobuyuki SOGA (Industrial Management)  
Yoshiaki TACHIBANA (Industrial Management)

キーワード：新型コロナウイルス、大学生、アンケート調査  
Keywords: Covid-19, University students, Questionnaire survey

【原稿受付：2023年1月31日 受理・採録決定：2023年2月10日】

### 要旨

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、遠隔授業が行われてきた2020年度から約2年以上が過ぎ、2022年度現在では大学での講義は原則対面で実施されることになった。現在においても新型コロナウイルスの影響を受けてはいるものの、原則対面での講義が行われるようになったことによって、学生の学修状況や生活、課外活動、メンタルヘルスにはどのような変化がもたらされ、学生はそれをどのように受けとめているのであろうか。また、原則対面となったことが「Before コロナ」に戻ったといえるのであろうか。本研究では、2022年11月に愛媛大学社会共創学部所属する学生に対して、原則対面授業を行うこととなった2022年度前期での学修や生活状況に関するアンケート調査を実施し、その集計結果や自由記述の回答内容に基づいて、学生の受講姿勢や生活面等の変化について検討する。

### Abstract

Approximately over two years have passed since 2020, when the spread of the COVID-19 pandemic began, and now lectures at universities in Japan have gone back to being predominantly face-to-face. The purpose of this study is to examine how the shift from remote learning to face-to-face university lectures has affected the attitudes of the students of the Faculty of Collaborative Regional Innovation at Ehime University, towards their education, lives, and mental health. A questionnaire survey was conducted in November 2022 with the

students of the faculty, regarding their learning and living conditions in the first semester of 2022. The recent changes in the students' attitudes towards both, lectures and their lives, have been subsequently analysed based on the results of the survey.

## 1. はじめに

2020年以降、新型コロナウイルス感染症が流行し、大学においても主に2020年度から新型コロナウイルスの感染防止を図るために変化を迫られ、遠隔授業やオンライン会議などが実施されることとなった。各大学では、学生、教員、職員などの関係者が多かれ少なかれ新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、幾度も活動内容の調整を重ねてきている。このような影響は2022年度現在においても及んでいるものの、新型コロナウイルス感染症の拡大が報じられた初期(折戸・村田ら、2021)とは異なり、WITHコロナを前提とした活動へと方向性を変えつつある。2022年の4月からは国立大学を含む多くの大学において原則対面での講義が行われており、表面的にはBeforeコロナでの大学と同様の活動が行われつつあると考えられているかもしれない。しかしながら、いわゆる「コロナ禍」において様々な形態の遠隔授業を受講した経験を有する学生たちの意識や学修態度が変化してきた可能性もあり、原則対面となったことが「Beforeコロナ」に戻ったということを単純に意味するわけではないであろう。加えて、新型コロナウイルス感染者数の増減には2022年の4月以降にも波があり、常に感染状況や感染防止策を意識しながら、学生生活を送らざるを得ない状況は続いている。

その中で、そもそも「コロナ禍」における遠隔授業を高校あるいは大学生活の中で経験してきた学生たちは、原則対面となった大学でどのように学びと向き合い、学生生活を送っているのだろうか。本研究では、原則対面になったことによって学生の学修状況や生活に関する意識はどのような影響を受け、変化したのかについて、筆者らの属する愛媛大学社会共創学部の学生を対象に検討する。そのために、原則対面授業を行うこととなった2022年度前期の状況に関して、同学部に所属する学生に対するアンケート調査を実施した。本研究では、上記のアンケート調査結果全体の集計結果を示すとともに、原則対面となった2022年4月に入学した1回生とそれ以上の学年(大学院生を含む)との回答を比較し、それらに対する考察を加えていくこととする。

## 2. 学生を対象としたアンケート調査

### 2.1 先行研究と調査の概要

新型コロナウイルス感染症による大学生への影響については、これまでも調査研究が行われ(e.g. 飯田ら、2021; 梶谷・土本、2021; 澤田ら、2021; 細川、2021; 山根ら、2021)、学修状況、生活環境、インターンシップを含む就職活動などについて愛媛大学の学生を対象としたアンケート調査も実施されている(e.g. 赤間、2022; 岡本ら、2022; 除村ら、2022; Murata and Orito, 2022; 折戸・石丸ら、2021)。その中でも、2020年度から愛媛大学の法文学部学生を対象とした新型コロナウイルスの影響に関するアンケート調査が継続的に実施され(青木ら、2021; 青木ら、2022; 青木ら、2023)、学修面(授業形態、成績に対する主観的評価、遠隔授業の利点と困難さ、障害)、サポート面(遠隔授業に対する大学からの支援内容への評価、大学、自治体などからの緊急時支援の必要性とその内容など)、生活への影響(経済的影響、就職活動、メンタルヘルスなど)から、その状況が報告されている。

本研究では、愛媛大学における新型コロナウイルス感染症への対応状況<sup>1</sup>や社会動向をふまえ、また、上記の愛媛大学法文学部学生を対象とした調査(青木ら、2021; 青木ら、2022)における調査項目および結果を参照しながら、愛媛大学法文学部の研究プロジェクト組織との共同で2022年度前期に対応する質問票を設計し、アンケート調査を実施した<sup>2</sup>。アンケートは、Google formを用いたオンライン形式で2022年11月に愛媛大学社会共創学部の学生を対象に実施され、回答は任意でかつ原則匿名で回答可能とした。その結果、326件の有効回答を得ており、その属性は以下の表1に示される。

表1 回答者属性<sup>3</sup> (n=326 内2名留学生)

性別	男性	140	42.9%
	女性	181	55.5%
	その他	5	1.5%
学年	学部1回生	191	58.6%
	学部2回生	75	23.0%
	学部3回生	31	9.5%
	学部4回生以上	27	8.3%
	大学院	2	0.6%
居住形態	1人暮らし	198	60.7%
	実家暮らし、または家族と同居	118	36.2%
	学生寮	6	1.8%
	その他	4	1.2%
主な通学手段	自転車	245	75.2%
	バイク	34	10.4%
	徒歩	28	8.6%
	公共交通機関(電車・バスなど)	15	4.6%
	その他	4	1.2%
通学時間 (片道)	10分未満	184	56.4%
	10分以上30分未満	94	28.8%
	30分以上～1時間未満	39	12.0%
	1時間以上	9	2.8%

表2 社会共創学部専門科目での開講数およびその授業形態(2022年度前期)

	対面	遠隔	計
第1Q	128	2	130
第2Q	126	1	127
前期	170	3	173

表3 対面での授業科目数(全体) n=326

	1回生	割合	2回生	割合	3回生	割合	4回生以上	割合	全体計	割合
1科目	0	0.0%	0	0.0%	1	3.2%	15	51.7%	16	4.9%
2～5科目	116	60.7%	34	45.3%	22	71.0%	10	34.5%	182	55.8%
6科目以上	75	39.3%	41	54.7%	8	25.8%	2	6.9%	126	38.7%
なし	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	6.9%	2	0.6%
計	191		75		31		29		326	

表4 ZOOM等の同期型授業科目数 n=326

	1回生	割合	2回生	割合	3回生	割合	4回生以上	割合	全体計	割合
1科目	30	15.7%	13	17.3%	1	3.2%	5	17.2%	49	15.0%
2～5科目	55	28.8%	11	14.7%	7	22.6%	3	10.3%	76	23.3%
6科目以上	5	2.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	1.5%
なし	101	52.9%	51	68.0%	23	74.2%	21	72.4%	196	60.1%
計	191		75		31		29		326	

表5 Moodleを利用した動画配信型授業科目数 n=326

	1回生	割合	2回生	割合	3回生	割合	4回生以上	割合	全体計	割合
1科目	5	2.6%	9	12.0%	6	19.4%	1	3.4%	21	6.4%
2～5科目	156	81.7%	59	78.7%	7	22.6%	2	6.9%	224	68.7%
6科目以上	28	14.7%	4	5.3%	0	0.0%	0	0.0%	32	9.8%
なし	2	1.0%	3	4.0%	18	58.1%	26	89.7%	49	15.0%
計	191		75		31		29		326	

## 2.2 アンケート調査結果

### 2.2.1 学修面(履修状況、成績)

本アンケート調査では、まず学修面に関して2022年度前期に受講した講義の授業形態について確認した。2022年度(令和4年度)前期における愛媛大学社会共創学部の専門科目での授業形態は表2にまとめられ<sup>4</sup>、ほぼ対面形式での授業が行われている。なお、愛媛大学では共通教育科目と呼ばれる一般教養科目については、2022年度も一部遠隔授業を行うこととしているため、対面での授業は主に学部の専門科目で行われている。そのため、特に共通教育科目を履修する可能性の高い1回生から2回生は、遠隔授業を一定数受講している場合が多い。反対に、3回生や4回生はゼミナール(演習科目)や卒業研究を含む専門科目を中心に履修しており、遠隔授業を履修していない場合もある。以下の表3から表6は、アンケートの回答者に「対面での授業」、「ZOOM等の同期型授業」、「Moodle<sup>5</sup>を利用した動画配信型授業」、「Moodleを利用した資料のみの非同期型授業」をそれぞれどの程度履修したかを聞いた結果を示している。

表6 Moodle を利用した資料のみの非同期型授業科目数 n=326

	1回生	割合	2回生	割合	3回生	割合	4回生以上	割合	全体計	割合
1科目	34	17.8%	18	24.0%	3	9.7%	0	0.0%	55	16.9%
2～5科目	122	63.9%	37	49.3%	6	19.4%	2	6.9%	167	51.2%
6科目以上	8	4.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	8	2.5%
なし	27	14.1%	20	26.7%	22	71.0%	27	93.1%	96	29.4%
計	191		75		31		29		326	

次に、2022年度前期よりも遠隔授業が多数実施されていたと思われる2021年度（昨年度）と比較した成績についての自己評価を、「昨年までと比較して、前期の成績（単位取得数、評価）はいかがでしたか。」

として尋ねた結果が表7に示される。2回生以上でも「成績は変わらない」が最も多く、「昨年と比べて成績が下がった」と「昨年と比べて成績は良かった」とする回答者の比率にはほとんど差がない結果となった。

表7 昨年と比較した前期の成績 n=326

	1回生	割合	2回生	割合	3回生	割合	4回生以上	割合	全体計	割合
1回生なので昨年と比べられない	189	99.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	189	58.0%
昨年と比べて成績は変わらない	0	0.0%	32	42.7%	16	51.6%	16	55.2%	64	19.6%
昨年と比べて成績は下がった	0	0.0%	23	30.7%	5	16.1%	2	6.9%	30	9.2%
昨年と比べて成績は良かった	1	0.5%	20	26.7%	7	22.6%	1	3.4%	29	8.9%
昨年と比べて履修した科目が少なく 比べて比較できない	1	0.5%	0	0.0%	3	9.7%	8	27.6%	12	3.7%
その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	6.9%	2	0.6%
計	191		75		31		29		326	

## 2.2.2 学修面（対面授業と遠隔授業）

2回生以上の学生にとって、2022年度の前期から原則対面授業となったことで、それ以前の大学生活とはある程度異なる学修、生活環境となったことが予想される。また、1回生にとっても、教養科目（愛媛大学での共通教育科目、2.2.1参照）において一部遠隔授業が行われており、実質的には大学で対面と遠隔授業の両方を経験していることになる。その中で、学生は2022年4月から原則対面授業になったことをどのように評価しているのであろうか。本アンケート調査では、「原則、対面授業を受けるようになって良かったことを教えてください。」という問いを設定し、その良かった点を選択してもらった（複数回答可）。

図1に示されるその結果において、全回答者から最も評価された点は「友人と一緒に授業を受けられ、授業や大学生活に関する情報を共有しやすくなった」（215件、66.0%）という学生同士のコミュニケーションや情報共有が円滑になったことであり、6割以上の回答者から選択されている。二番目が「生活にメリハリがつき、大学生活にやる気が出た」（155件、47.5%）であり、対面での活動によって生活のリズムや活気が生まれたことがあげられている。三番目も「教員や他の学生への質問、意見交換、グループディスカッションがしやすい」（125件、38.3%）と続き、教員も含めてのコミュニケーションがとりやすい点が評価されている。

図1 原則対面授業になって良かったこと（複数回答可） n=326

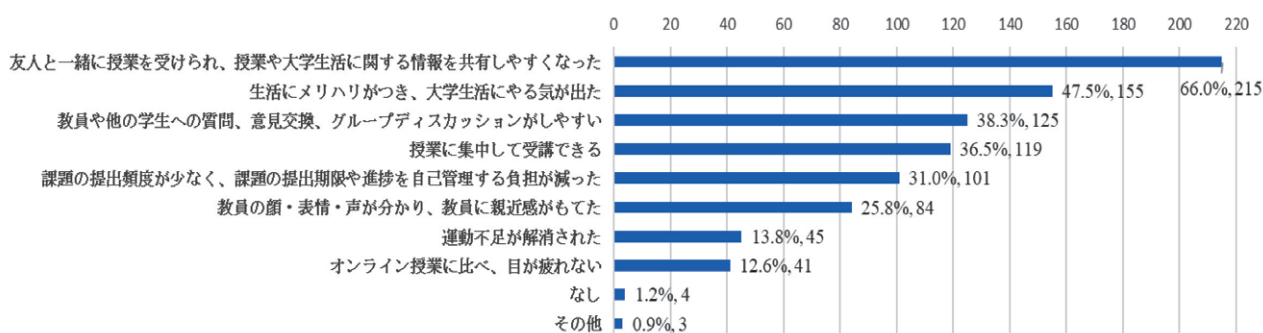


表 8 原則対面授業になって良かったこと・学年（複数回答可） n=326

	1回生 (191)	割合	2回生以上 (135)	割合	
友人と一緒に授業を受けられ、授業や大学生活に関する情報を共有しやすくなった	127	66.5%	88	65.2%	
生活にメリハリが付き、大学生活にやる気が出た	96	50.3%	59	43.7%	
教員や他の学生への質問、意見交換、グループディスカッションがしやすい	67	35.1%	58	43.0%	
授業に集中して受講できる	73	38.2%	46	34.1%	
<b>課題の提出頻度が少なく、課題の提出期限や進捗を自己管理する負担が減った</b>	<b>48</b>	<b>25.1%</b>	<b>53</b>	<b>39.3%</b>	**
<b>教員の顔・表情・声が分かり、教員に親近感をもてた</b>	<b>38</b>	<b>19.9%</b>	<b>46</b>	<b>34.1%</b>	**
運動不足が解消された	21	11.0%	24	17.8%	
オンライン授業に比べ、目が疲れない	21	11.0%	20	14.8%	
なし	1	0.5%	3	2.2%	
その他	2	1.0%	1	0.7%	

原則対面となった環境から大学生活をスタートさせている1回生と、2回生以上の回答結果を集計し、検定した結果<sup>6</sup>（表8）、「課題の提出頻度が少なく、課題の提出期限や進捗を自己管理する負担が減った」（ $p=0.0066$ ）、「教員の顔・表情・声が分かり、教員に親近感をもてた」（ $p=0.0039$ ）において1%水準での有意差がみられ、いずれも2回生以上に多く回答されていた。

逆に、2020年度から大学や高校においても遠隔授業が部分的にでも行われていた中で、学生はすでに遠隔授業の受講に慣れてきていることも考えられ、2022年度から対面授業に変わったことによって何らかの戸惑いや不便さを感じていることはあるのか、あるとすればそれはどのような点なのかについて調査した。この点については、「原則、対面授業を受けるようになったことで困ったことを教えてください。」として、回答してもらった（複数回答可）。

この結果（図2）、全体で半数を超える学生が「空コマや移動時間があるため、生活時間の融通が利かなくなった」（172件、52.8%）を最も選択しており、三番目、四番目に挙げられている「移動に時間がか

かり、面倒に感じる」（125件、38.3%）、「1日にオンラインと対面の講義が混在するため、受講環境やスケジュールの調整が難しくなった」（105件、32.2%）とも類似した感覚を示している。二番目に「対面での授業が長く感じる」（156件、47.9%）が、五番目には「毎日、通学することが体力的にしんどい」（97件、29.8%）が選択され、対面の授業に出席した際の時間感覚の変化や通学そのものの身体的負担が感じられている。

「原則対面授業になって困ったこと」についても、1回生と2回生以上の回答結果を比較したところ（表9）、「1日にオンラインと対面の講義が混在するため、受講環境やスケジュールの調整が難しくなった」（ $p=0.0012$ ）、「大学にあまり友人、知人が多くないため、孤独を感じる」（ $p=0.0020$ ）において1%水準で、「移動に時間がかかり、面倒に感じる」（ $p=0.0179$ ）、「毎日、通学することが体力的にしんどい。」（ $p=0.0445$ ）、「資料や動画を繰り返し見ることができなくなり、勉強や復習がしにくくなった」（ $p=0.0358$ ）において5%水準で有意差が見られた。

図 2 原則対面授業になって困ったこと（複数回答可） n=326

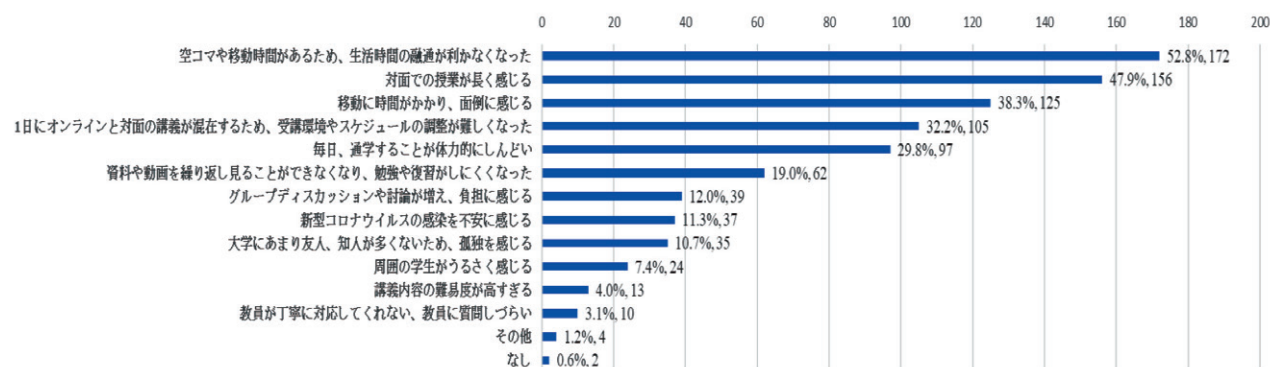


表9 原則対面授業になって困ったこと・学年（複数回答可） n=326

	1回生 (191)	割合	2回生以上 (135)	割合	
空コマや移動時間があるため、生活時間の融通が利かなくなった	101	52.9%	71	52.6%	
対面での授業が長く感じる	99	51.8%	57	42.2%	
移動に時間がかかり、面倒に感じる	63	33.0%	62	45.9%	*
1日にオンラインと対面の講義が混在するため、受講環境やスケジュールの調整が難しくなった	75	39.3%	30	22.2%	**
毎日、通学することが体力的にしんどい	65	34.0%	32	23.7%	*
資料や動画を繰り返し見ることができなくなり、勉強や復習がしにくくなった	29	15.2%	33	24.4%	*
グループディスカッションや討論が増え、負担に感じる	22	11.5%	17	12.6%	
新型コロナウイルスの感染を不安に感じる	27	14.1%	10	7.4%	
大学にあまり友人、知人が多くないため、孤独を感じる	12	6.3%	23	17.0%	**
周囲の学生がうるさく感じる	10	5.2%	14	10.4%	
講義内容の難易度が高すぎる	9	4.7%	4	3.0%	
教員が丁寧に対応してくれない、教員に質問しづらい	5	2.6%	5	3.7%	
その他	2	1.0%	2	1.5%	
なし	1	0.5%	1	0.7%	

次に、2022年度前期においても一定数が受講した遠隔授業について、「遠隔授業を受ける上で、困ったことを教えてください。」として回答してもらった（複数回答可）。「遠隔授業がなかった」とする19件を除いた集計結果は図3に示され、困ったことについては「対面授業で良かったこと」に比べて回答にややばらつきがある。その中でも、全体で最も多い回答は「課題やレポート提出の回数が多い」（127件、41.4%）であり、4割以上の学生から回答されている。二番目に、「非同期の講義はいつでも受講できるため後回しになり、やる気が起きなかった

ため後回しになり、やる気が起きなかった」（94件、30.6%）、「複数の科目の課題やレポート提出日が重なる」（91件、29.6%）が3割ほど選択されている。他方で、遠隔授業では教員の指示や連絡、課題の作成方法などについてわかりにくいと感じたケースも一割程度存在している。また、「遠隔授業になって困ったこと」について、学年別での検定を行ったところ（表10）、「大学や担当教員からのメール連絡が頻繁であった」についてのみ5%水準で有意差がみられた（ $p = .0384$ ）。

図3 遠隔授業になって困ったこと（複数回答可） n=307

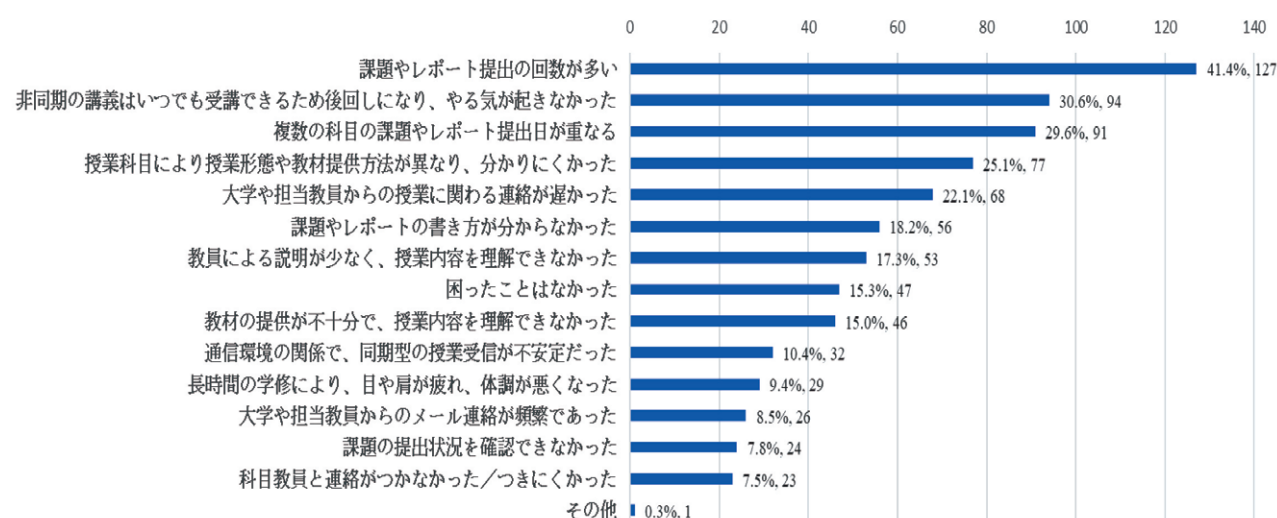


表 10 遠隔授業になって困ったこと・学年（複数回答可） n=307

	1回生 (188)	割合	2回生以上 (119)	割合	
課題やレポート提出の回数が多い	70	37.2%	57	47.9%	
非同期の講義はいつでも受講できるため後回しになり、やる気が起きなかった	53	28.2%	41	34.5%	
複数の科目の課題やレポート提出日が重なる	51	27.1%	40	33.6%	
授業科目により授業形態や教材提供方法が異なり、分かりにくかった	47	25.0%	30	25.2%	
大学や担当教員からの授業に関わる連絡が遅かった	39	20.7%	29	24.4%	
課題やレポートの書き方が分からなかった	40	21.3%	16	13.4%	
教員による説明が少なく、授業内容を理解できなかった	38	20.2%	15	12.6%	
困ったことはなかった	30	16.0%	17	14.3%	
教材の提供が不十分で、授業内容を理解できなかった	33	17.6%	13	10.9%	
通信環境の関係で、同期型の授業受信が不安定だった	17	9.0%	15	12.6%	
長時間の学修により、目や肩が疲れ、体調が悪くなった	16	8.5%	13	10.9%	
<b>大学や担当教員からのメール連絡が頻繁であった</b>	<b>11</b>	<b>5.9%</b>	<b>15</b>	<b>12.6%</b>	*
課題の提出状況を確認できなかった	18	9.6%	6	5.0%	
科目教員と連絡がつかなかった/つきにくかった	14	7.4%	9	7.6%	
その他	1	0.5%	0	0.0%	

遠隔授業においては、利用するコンピュータ機器やネットワーク回線などの技術的、環境的問題が発生する場合も考えられ、「遠隔授業を受ける上で障害になっていたことはどのようなことですか?」という問いを設定している（複数回答可）。「遠隔授業がなかった」（20件）を除いて集計した結果（図4）、7割以上の回答者が「特になし」と回答しており、技術的なあるいは受講環境に関する問題については概ね解消され

ている場合が多いことがわかる一方、2022年度においても通信環境やコンピュータの性能、受講環境に関する問題を抱える学生は少数ながら存在していることがうかがえる。1回生と2回生以上での回答では（表11）、ほぼ同様の傾向が見られたものの、検定の結果、「Moodleなどの操作方法がわからなかった」において5%水準での有意差がみられた（ $p=0.0484$ ）。

図 4 遠隔授業での障害（複数回答可） n=306

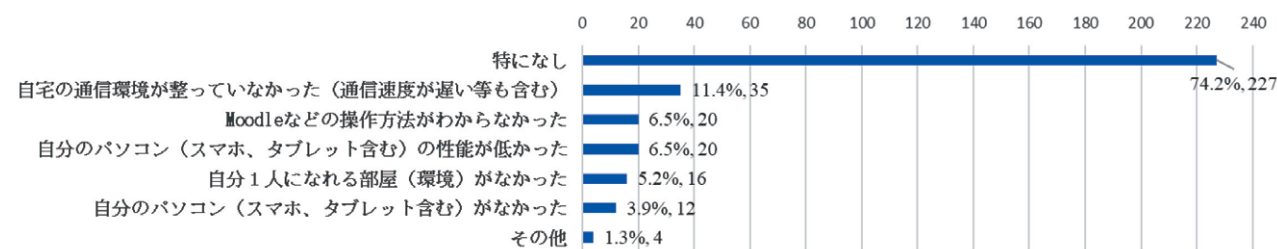


表 11 遠隔授業での障害・学年（複数回答可） n=306

	1回生 (189)	割合	2回生以上 (117)	割合	
特になし	137	72.5%	90	76.9%	
自宅の通信環境が整っていなかった（通信速度が遅い等も含む）	19	10.1%	16	13.7%	
<b>Moodleなどの操作方法がわからなかった</b>	<b>17</b>	<b>9.0%</b>	<b>3</b>	<b>2.6%</b>	*
自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）の性能が低かった	12	6.3%	8	6.8%	
自分1人になれる部屋（環境）がなかった	9	4.8%	7	6.0%	
自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）がなかった	10	5.3%	2	1.7%	
その他	3	1.6%	1	0.9%	

他方、対面授業と同様に、遠隔授業のメリットが認識されていることもある。図5は、「遠隔授業を受ける上で、良かったことがあれば教えてください。」という問いに対する回答結果を表している（複数回答可、「遠隔授業はなかった」とする20件を除く）。この結果、「自分の好きな時間や場所で受講できた」(258件、84.3%)が最も多く、8割を上回る回答者から選択され、「通学時間がなかった」(189件、61.8%)、「動画配信型の教材を繰り返し視聴できた」(149件、

48.7%)と続いている。遠隔授業のメリットとして、非同期型授業のオンデマンド性や通学のための移動負担がないことが評価されており、前述の「原則対面授業になって困ったこと」に対する回答結果とおおよそ矛盾しない結果となった。なお、「遠隔授業で良かったこと」に関する学年別集計の検定結果(表12)では、「動画配信型の教材を繰り返し視聴できた」において5%水準で有意差がみられた( $p=.0183$ )。

図5 遠隔授業で良かったこと(複数回答可) n=306

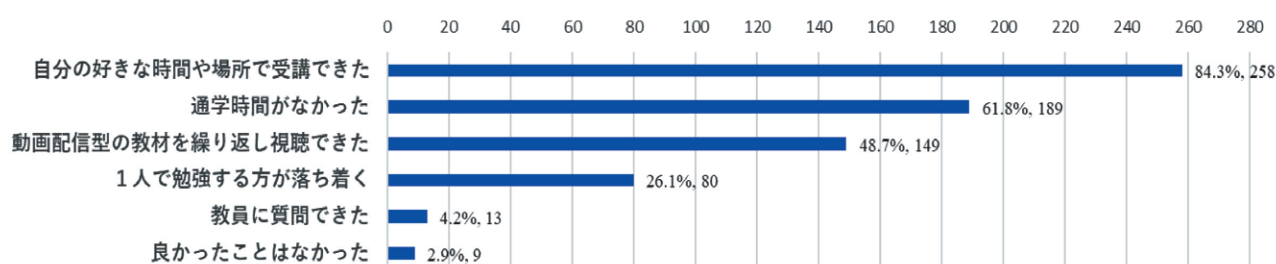


表12 遠隔授業で良かったこと・学年(複数回答可) n=306

	1回生(189)	割合	2回生以上(117)	割合	
自分の好きな時間や場所で受講できた	158	83.6%	100	85.5%	
通学時間がなかった	111	58.7%	78	66.7%	
<b>動画配信型の教材を繰り返し視聴できた</b>	<b>82</b>	<b>43.4%</b>	<b>67</b>	<b>57.3%</b>	*
1人で勉強する方が落ち着く	52	27.5%	28	23.9%	
教員に質問できた	9	4.8%	4	3.4%	
良かったことはなかった	7	3.7%	2	1.7%	

さらに、「対面授業や遠隔授業について、あなたの考えに近いものを教えてください。」として、遠隔授業と対面授業を受講した上で問題なく受けられたか、つらかったかについて、自分の感覚に最も近いものを選んでもらった。その結果(図6)を見ると(「遠隔授業はなかった」(13件)を除く)、6割以上の学生が「遠隔も対面も問題なく受けられた」(209件、66.8%)としている一方で、「遠隔で授業を受けるのは良く、対面が良かった」(31件、9.9%)を上回る結果となった。また、全体のうち4.8%の学生は「遠隔も対面も両方つらかった」と回答しており、授業形態以外の要因が関係している可能性もある。なお、「授業形態についての考え」への回答では1回生と2回生以上の回答に有意差はみられなかった(表13)。

図6 授業形態についての考え(全体) n=313

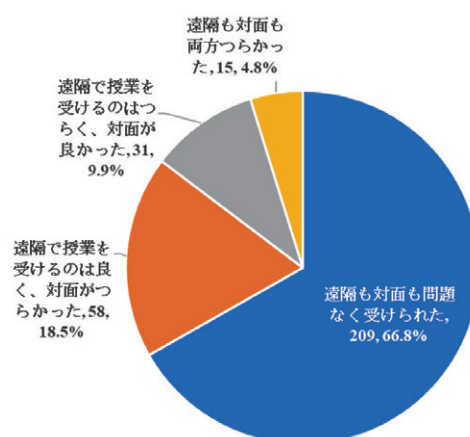




表 13 授業形態についての考え・学年 n=313

	1回生 (189)	割合	2回生以上 (124)	割合
遠隔も対面も問題なく受けられた	130	68.8%	79	63.7%
遠隔で授業を受けるのは良く、対面がなかった	37	19.6%	21	16.9%
遠隔で授業を受けるのはつらく、対面が良かった	16	8.5%	15	12.1%
遠隔も対面も両方なかった	6	3.2%	9	7.3%
計	189		124	

図 6、表 13 に示される授業形態に対する考えは、受講環境の利便性だけに偏った回答となってしまう可能性があるため、授業の理解度という要素を付与し、「全体的に授業の理解度に関して、遠隔と対面のどちらのほうが良かったですか。」と聞いた結果が図 7 に示される。これを見ると「対面」(148 件、45.4%)

が 4 割近くと最も多いものの、「どちらも変わらない」(90 件、27.6%)、「遠隔」(88 件、27.0%) を選択する学生も 3 割弱存在している。1 回生と 2 回生以上での集計結果 (表 14) への検定の結果では、対面については 1% 水準 ( $p=0.0082$ )、遠隔については 5% 水準での有意差がみられた ( $p=0.0325$ )。

図 7 全体的な授業の理解度 n=326

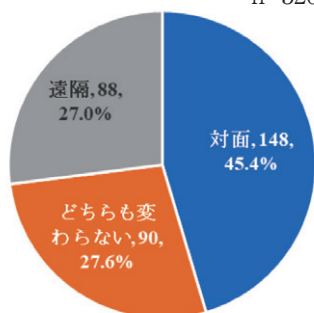


表 14 全体的な授業の理解度・学年 n=326

	1回生 (191)	割合	2回生以上 (135)	割合	
対面	75	39.3%	73	54.1%	**
どちらも変わらない	56	29.3%	34	25.2%	
遠隔	60	31.4%	28	20.7%	*
計	191		135		

なお、任意の自由記述回答として、「原則として対面授業になった状況で、大学や教員に希望することがあれば、自由にお書き下さい。」と聞いた項目については 13 件の回答が寄せられ、授業形態に関するものが 5 件、授業内容に関するものが 3 件、新型コロナウイルス感染症対策に関するものが 3 件、その他 2 件の意見があった。ここでは、授業形態としてハイブリット型の講義を望む声が多くみられた。

### 2.2.3 課外活動、生活面 (経済的影響、就職活動)

大学での学修に限らず、課外活動や生活面においても、原則対面となった 2022 年前期においてなんらかの変化や影響は生じたのであろうか。これについて、「フィールドワークや部活・サークル活動において、どのような影響がありましたか。」として、複数回答可で回答を求めた結果は図 8 に示される。全体の 6 割以上の回答者が「学内 (外) で知人・友人が増えた」(209 件、64.1%)、4 割以上の回答者は「身体を動かしたり、仲間と活動することができ、生活が楽しくなった」(137 件、42.0%) を選択しており、「学業

以外で打ち込むことが見つかった」(82 件、25.2%) とする回答者も 4 分の 1 程度となった。原則対面となり、リアルな空間での活動を通じてコミュニケーションが増え、その喜びや充実感があることや、新たな興味の対象を見出した回答者が多いことがわかる。しかしその一方で、「人間関係の煩わしさが増えた」(33 件、10.1%) とする回答者も 1 割ほど存在する。なお、1 回生と 2 回生以上の回答結果 (表 15) では、「学内 (外) で知人・友人が増えた」( $p=0.0252$ )、および「フィールドワークを行わなかった、または、部活・サークルに所属していない」( $p=0.0491$ ) において 5% 水準での有意差がみられた。

図8 課外活動での影響（複数回答可） n=326

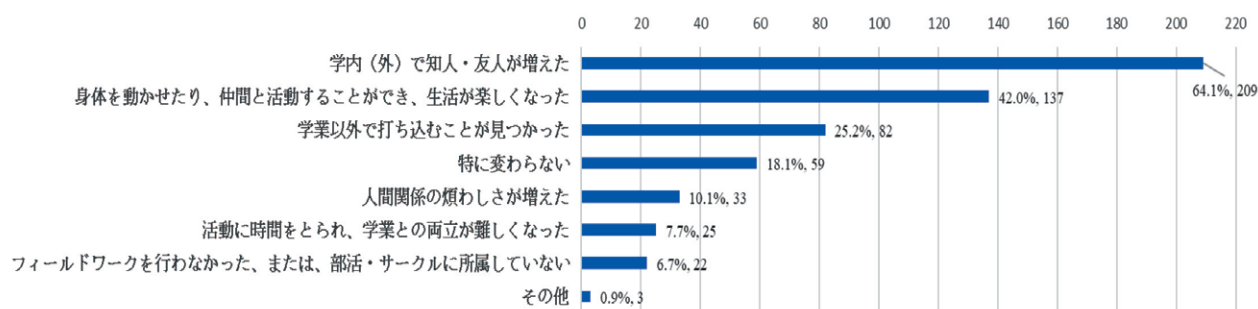


表15 課外活動での影響・学年（複数回答可） n=326

	1回生 (191)	割合	2回生以上 (135)	割合	
学内(外)で知人・友人が増えた	132	69.1%	77	57.0%	*
身体を動かしたり、仲間と活動することができ、生活が楽しくなった	84	44.0%	53	39.3%	
学業以外で打ち込むことが見つかった	45	23.6%	37	27.4%	
特に変わらない	33	17.3%	26	19.3%	
人間関係の煩わしさが増えた	20	10.5%	13	9.6%	
活動に時間をとられ、学業との両立が難しくなった	17	8.9%	8	5.9%	
フィールドワークを行わなかった、または、部活・サークルに所属していない	8	4.2%	14	10.4%	*
その他	1	0.5%	2	1.5%	

次に、経済的な影響について「2022年4月以降も感染拡大の波がある中で、どのような経済的な影響がありましたか。」と聞いた結果（複数回答可）が次の図9である。アルバイトに関して最も多く選択されたのは「アルバイトに入る回数や時間に変化はなかった」（118件、36.2%）であり、次いで「新たにアルバイトを始めた」（100件、30.7%）であった。「アルバイトに入る回数や時間が増えた」（54件、16.6%）が「アルバイトに入る回数や時間が減った」（40件、12.3%）よりも若干多く、「アルバイト先が休業したり、雇止めにあった」（14件、4.3%）という回答も

少数ながら存在する。仕送りに関しては「保護者からの仕送りに変化はなかった」（82件、25.2%）が最も多く選択された。1回生と2回生以上で集計し、検定を行った結果（表16）、「アルバイトに入る回数や時間が減った」（ $p=0.0012$ ）について1%水準で、「新たにアルバイトを始めた」（ $p=0.0218$ ）について5%水準で有意差が見られた。

図9 経済的影響（複数回答可） n=326

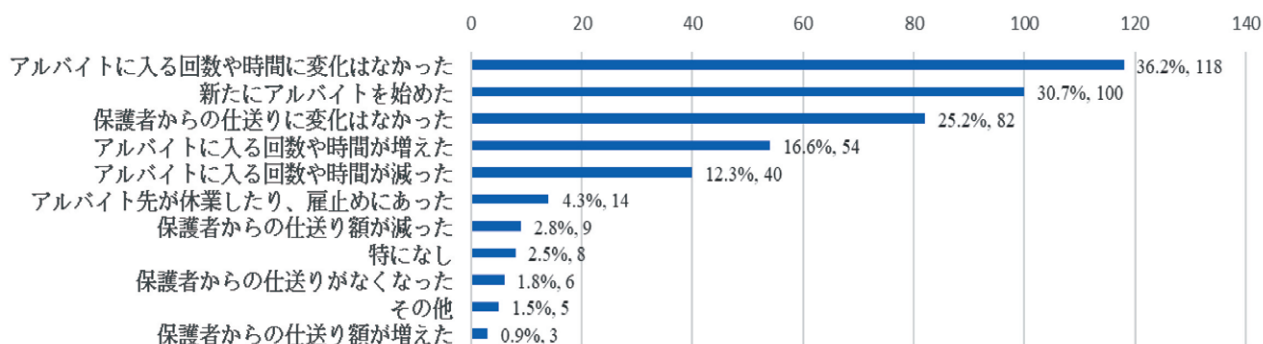


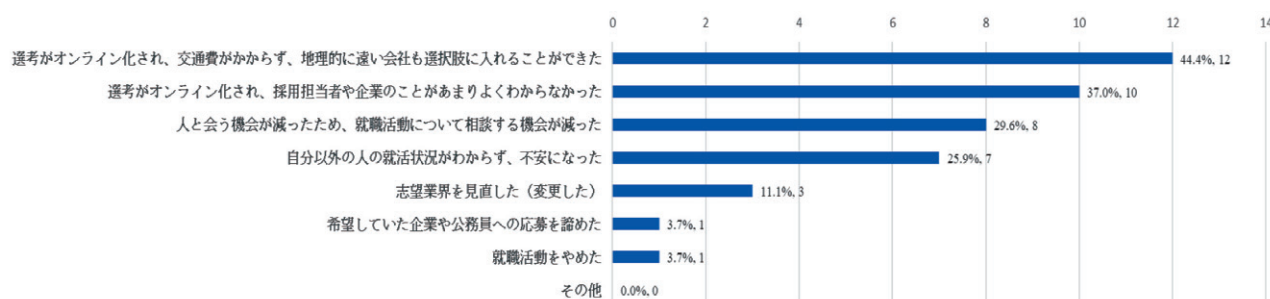
表 16 経済的影響・学年（複数回答可） n=326

	1 回生 (191)	割合	2 回生以上 (135)	割合	
アルバイトに入る回数や時間に変化はなかった	67	35.1%	51	37.8%	
<b>新たにアルバイトを始めた</b>	<b>68</b>	<b>35.6%</b>	<b>32</b>	<b>23.7%</b>	*
保護者からの仕送りに変化はなかった	50	26.2%	32	23.7%	
アルバイトに入る回数や時間が増えた	29	15.2%	25	18.5%	
<b>アルバイトに入る回数や時間が減った</b>	<b>14</b>	<b>7.3%</b>	<b>26</b>	<b>19.3%</b>	**
アルバイト先が休業したり、雇止めにあった	7	3.7%	7	5.2%	
保護者からの仕送り額が減った	5	2.6%	4	3.0%	
特になし	4	2.1%	4	3.0%	
保護者からの仕送りがなくなった	2	1.0%	4	3.0%	
その他	3	1.6%	2	1.5%	
保護者からの仕送り額が増えた	1	0.5%	2	1.5%	

卒業後の進路に関わる、就職活動への影響について、「就職活動（インターンシップは除く）にどのような影響がありましたか。」という問いを設定し、複数回答可で回答を求めた結果、回答者に3回生以下が多かったため、「4回生以上ではない、または就職活動はしていない」が8割以上となった。学部4回生（27件）のみを対象とした集計結果（図10）では「選考がオンライン化され、交通費がかからず、地理的に遠い会社も選択肢に入れることができた」というポ

ジティブな影響があったとする回答が12件（44.4%）であった。これに対して、「選考がオンライン化され、採用担当者や企業のことがあまりよくわからなかった」（10件、37.0%）、「人と会う機会が減ったため、就職活動について相談する機会が減った」（8件、29.6%）、「自分以外の人々の就活状況がわからず、不安になった」（7件、25.9%）とする回答も4回生全体で2割以上みられ、ネガティブな影響も同程度に感じられていることがわかる<sup>7</sup>。

図 10 就職活動への影響・4回生（複数回答可） n=27



## 2.2.4 生活面（メンタルヘルス）

生活面の中でもメンタルヘルスに関して、「原則、対面授業になって、メンタルヘルスにどのような変化がありましたか。」という問いを設定し、複数回答可で回答を求めた結果（図11）、6割以上の回答者は「通常と変わらず、安定的に過ごした」（203件、62.3%）としている。中でも、ポジティブな変化として「コミュニケーションが活発になり、楽しくなった」（92件、28.2%）が二番目に多く、「体を動かすことによって体調が良くなった、健康になった」との回答も8.3%みられた。他方、「疲れた感じがした、または気力がなかった」（52件、16.0%）が三番目に多

く、それ以外にも一割以下の回答者から気分の落ち込みや睡眠、食事などに関する問題が選択されている。1回生と2回生以上の集計結果に対して検定を行った結果（表17）、「通常と変わらず、安定的に過ごした」（ $p=0.0196$ ）、「疲れた感じがした、または気力がなかった」（ $p=0.0471$ ）において5%水準での有意差がみられた。

図11 メンタルヘルスへの変化（複数回答可） n=326

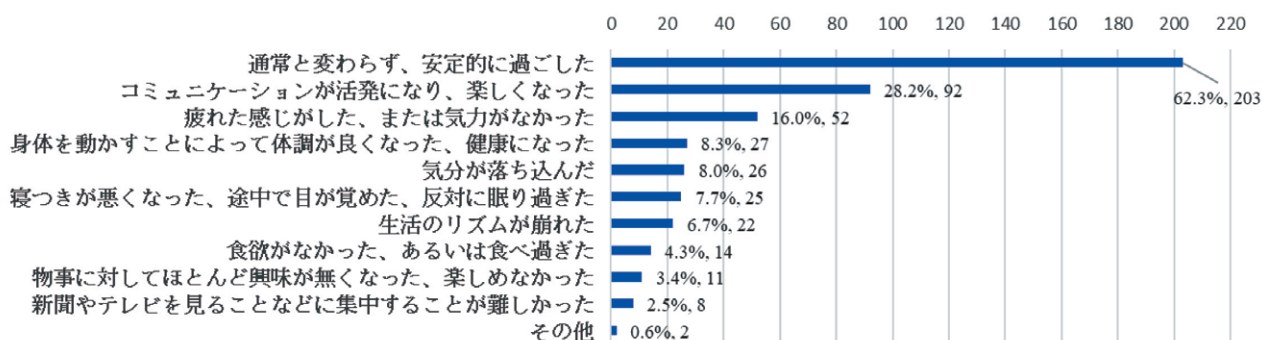


表17 メンタルヘルスへの変化・学年（複数回答可） n=326

	1回生 (191)	割合	2回生以上 (135)	割合	
通常と変わらず、安定的に過ごした	129	67.5%	74	54.8%	*
コミュニケーションが活発になり、楽しくなった	51	26.7%	41	30.4%	
疲れた感じがした、または気力がなかった	24	12.6%	28	20.7%	*
身体を動かすことによって体調が良くなった、健康になった	18	9.4%	9	6.7%	
気分が落ち込んだ	12	6.3%	14	10.4%	
寝つきが悪くなった、途中で目が覚めた、反対に眠り過ぎた	14	7.3%	11	8.1%	
生活のリズムが崩れた	17	8.9%	5	3.7%	
食欲がなかった、あるいは食べ過ぎた	11	5.8%	3	2.2%	
物事に対してほとんど興味が無くなった、楽しめなかった	6	3.1%	5	3.7%	
新聞やテレビを見ることなどに集中することが難しかった	4	2.1%	4	3.0%	
その他	0	0.0%	2	1.5%	

また、無回答を可として、「長期化するコロナ禍で、2022年4月以降、メンタル不調により医療機関やカウンセリングに行きましたか。」として、実際の医療機関やカウンセリングの受診状況を聞いた結果は、図12に示される。9割近くの回答者は受診していないとするものの、「迷ったが受診しなかった」（16件、4.9%）と「受診した」（13件、4.0%）を合わせると1割近くの回答者が何らかの精神的、心理的な問題を自覚していたことがわかる。また、「その他」と「未回答」を除いた上で学年別でみると（表18）、「迷ったが受診しなかった」（ $p=0.0458$ ）、「受診した」（ $p=0.0246$ ）においても5%水準での有意差がみられた。

図12 メンタルの不調による医療機関やカウンセリングの受診 n=326

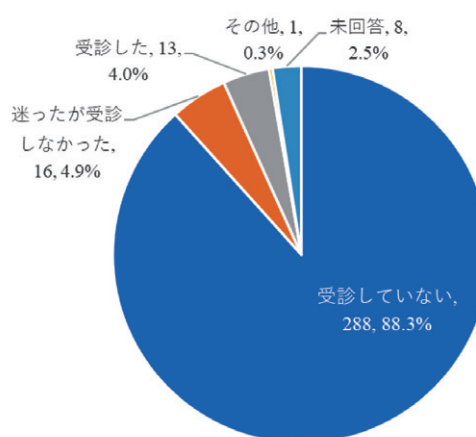


表18 メンタルの不調による医療機関やカウンセリングの受診・学年 n=317

	1回生 (185)	割合	2回生以上 (132)	割合	
受診していない	168	90.8%	120	90.9%	
迷ったが受診しなかった	5	2.7%	11	8.3%	*
受診した	12	6.5%	1	0.8%	*
計	185		132		

新型コロナウイルス感染症による大学生活への影響：大学生はBeforeコロナに戻ることができるのか？

2.2.5 自由記述回答（対面授業、感染者増加、夏季休業期間）

定性データからも状況を把握するために、アンケート調査の最後に、任意の自由記述の項目を3問設定した。一つ目は、「2022年4月以降、原則対面授業になり、あなたの生活に、どのような影響がありましたか。自由にお書きください。」という問いであり、原則対面授業になったことによる影響を聞いている。その結果

（表19）、具体的な回答が72件得られ、最も多い回答内容は、「生活のリズム」に関するものであり（33件）、次に「交友関係」（11件）、両方に関わる友人との関わりが生活のリズムをもたらすとの指摘も3件みられ、「原則対面授業になって良かったこと」（図1、表8）と同様の記述が多く見られた。続いて、「生活時間やスケジュール管理」についての回答は10件、「通学」に関する回答は7件あり、ここでは前述の「原則

表19 原則対面授業になったことによる影響（任意、自由記述、すべて原文ママ）

	学部1回生 (27/72 37.5%)	学部2回生以上 (45/72 62.5%)
生活のリズム (33件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 今まで以上に規則正しい時間で生活するようになった</li> <li>2. <b>朝起きるのが辛かった</b>が、早く寝ようとする気持ちは芽生えた。</li> <li>3. 授業のために起床を心がけるようになったが<b>逆に起床時間が気にならずに寝れない日</b>ができた。</li> <li>4. パイト以外で外に出るようになり、前よりも健康状態が良くなったと思う。</li> <li>5. 生活リズムが整った</li> <li>6. 生活リズムは規則正しくなると感じる。</li> <li>7. 生活リズムが整った。</li> <li>8. 生活リズムが整った</li> <li>9. 生活リズムが整えられたが<b>1限授業の時パイトやサークルの疲れから寝不足を感じる</b>ことがあった。</li> <li>10. 生活習慣が整った</li> <li>11. 朝起きるようになった。</li> <li>12. 生活リズムを直すことができた</li> <li>13. メリハリのある生活が送れた</li> <li>14. 朝起きるので規則正しい生活が送れるようになった。</li> <li>15. 朝起きることが多くなり、生活リズムを整えることができた。</li> <li>16. <b>体力面ではしんどい時もあった</b>がメリハリが付き大学生を実感できた。</li> <li>17. メリハリが付き、オンラインの授業も対面の授業もあって無理なく取り組めていて楽しいです。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生活リズムを整えることにした。遠隔授業の際は、多少眠くても家で体を崩せるため講義に集中できたが、対面だとそれが難しかった。<b>夜あまり寝れずに授業に臨んでしまい、広義に集中できないことも多かった。</b>そのため、前日には夜更かしせず早寝早起きを心がけるようになった。</li> <li>2. 早寝早起きが当たり前になった</li> <li>3. <b>対面授業以外外に出なくなった。</b></li> <li>4. <b>生活リズムが崩れており、あまり睡眠をとれずに学校に行くことが何度かあった。</b></li> <li>5. 外に出る機会が増えた。</li> <li>6. <b>一限が多く朝起きるのが辛かった。</b></li> <li>7. 午前中に起きられるようになった</li> <li>8. 朝早く起きたりと、割と規則正しい生活が送れるようになった。でも、遠隔の方が楽だと感じてしまう。</li> <li>9. 生活リズムが整った。</li> <li>10. 早起きをするようになった。学食に頻繁に行くようになった。</li> <li>11. 授業がない日でも1限の時間までには起きて活動できる状態を作れるように心がけるようになった。</li> <li>12. 生活にメリハリができた。</li> <li>13. 寝つきが良くなった</li> <li>14. 生活習慣が変化した。</li> <li>15. 早起きをするようになった。</li> <li>16. 通学に時間がかかるため、1度登校すると最終授業が終わるまで帰れない。生活にメリハリがつく。</li> </ol>
交友関係 (11件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 友達と話す機会が多くなったので、楽しさが増した。</li> <li>2. 先生や他の生徒と話せる機会が増えて、孤独感が減った。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業がほとんどないため、人と話す機会があって、学校に行くのが楽しくなった</li> <li>2. 学校で友達に会えてうれしい。</li> <li>3. 人と会うことで気が楽になった。</li> <li>4. 交友関係がふえた</li> <li>5. 友達と会う機会が増え、ラーコモなどで友達と課題をしたり、一緒にご飯を食べたり、未完商店での活動も増えた</li> <li>6. 友人関係が活発化した</li> <li>7. 友達と一緒に授業を受けられるのでモチベーションが上がる。また、昼飯を一緒に食べたり授業後しゃべれるので楽しい</li> <li>8. 友人に会う機会が増えた</li> <li>9. 毎日外に出ることが続き、生活にメリハリができたが、<b>体力面で負担が大きく、しんどく感じることは増えた。</b>しかし、授業では、同級生とのコミュニケーションが取れたり、集中して授業を受けられるようになった。</li> </ol>
生活と交友関係 (3件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 友人との関わりが増え、生活リズムが良くなった。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 友達とかかわる時間が増え、規則正しい生活ができるようになった。</li> <li>2. 去年と比べて人とコミュニケーションをとる機会がかなり増え、とても体調が良くなった。</li> </ol>
生活時間・スケジュール管理 (10件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>自宅が大学から遠く、自由な時間が減少しました。</b></li> <li>2. <b>移動時間が必要になり、利用できる時間が減少した。</b></li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>空きコマの使い方が定まらない。</b></li> <li>2. <b>学校に行く機会が増えたが、授業が少ないため部活までの時間の使い方に戸惑った</b></li> <li>3. <b>他のことにかかけられる時間が減った</b></li> <li>4. <b>わずかな授業数のために大学にいかなければいけないなくなった。</b></li> <li>5. <b>対面授業でよくも悪くも時間が拘束された。</b></li> <li>6. <b>時間に制約がわかるようになった。</b></li> <li>7. 大学中心の生活になり、楽しめるようになったが、時間の使い方など見直すべき部分もあり、慣れるのに時間を要した。</li> <li>8. 外にでて活動する時間が増えた</li> </ol>
通学 (7件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>通学するのが面倒くさい</b></li> <li>2. <b>通学時間が増え苦痛に感じている</b></li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 通学に伴って運動量が増えた</li> <li>2. <b>通学時間が長い</b>ため、<b>時間的な自由が減った</b></li> <li>3. <b>自転車をこぐのがしんどい</b></li> <li>4. <b>通学がしんどいので疲れるようになった。</b></li> <li>5. <b>通学が不便</b></li> </ol>
精神面 (6件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 活発な日々を過ごすことができ、幸福感が上がった。</li> <li>2. <b>大学に通う日が増えて少ししんどい。</b></li> <li>3. <b>過去2年間、対面で授業を受けられずいたことが悔しく感じ、悲しい気持ちになる。</b></li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>人と会うことが増え、精神的につらいなど感じる</b>ことが増えた。</li> <li>2. <b>これまでずっとオンラインだったためか、学生生活の変化に思っていたよりも身体や精神が追いつかなかった。</b></li> <li>3. <b>疲れた</b></li> </ol>
コロナ対策 (1件)		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>対面授業ではコロナウイルス感染の恐れもあるため、感染予防に毎日神経を張り詰めていた結果、精神的に追い詰められた。</b>咳をしている人や熱があるにも関わらず、出席日数のため無理をしてでできている人などへの対策をしっかりしてほしい。</li> </ol>
授業 (1件)		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>教授の講義が無駄に長く感じる</b></li> </ol>

対面になって困ったこと」での回答と同様に、空きコマの使い方への戸惑いや自由に使える時間が減少したこと、講義時間が長く感じる、通学が身体的にしんどいという感覚が述べられている。なお、この回答への自由記述の回答率では1回生よりも2回生以上が上回り、太字に示されるネガティブな内容も多い。

表19からもみられるように、全体的に2回生以上の学生による自由記述によりネガティブな影響が述べられている場合が多い。この点について、テキストマイニングツール (User local <https://textmining.userlocal.jp/>) を使用) によって自由記述回答の感情傾向を可視化したところ、1回生ではポジティブが7.4%、中立が55.6%、ネガティブが37.0%、2回生以上はポジティブが3.7%、中立が51.9%、ネガティ

ブが44.0%となり、2回生上の回答内容のほうがよりネガティブな感情が見られる結果となった。

二つ目の任意・自由記述での質問項目として、「原則対面授業が続く中、行動制限はないものの、新型コロナウイルス感染者数が増加した時期もありました。このことによって、あなたの生活に、どのような影響がありましたか。自由にお書きください。」という質問を設定した。この結果、93件の回答があり、そのうちのおおよそ3割以上にあたる34件は「影響がない・特にない」ことを示すものであった。それ以外の主な回答結果(59件)は表20に示され、外出自粛や行動を制限していたことが最も多く、次いで感染に対する不安も多く述べられている。

表20 新型コロナウイルス感染症者数が増加したことによる影響(任意、自由記述、すべて原文ママ)

	学部1回生 (28/59 47.5%)	学部2回生以上 (31/59 52.5%)
外出・行動の自粛 (30件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>サークルがなかなか活動再開されず、参加したいが出来なかった。</li> <li>自由が少なかった</li> <li>旅行計画などが台無しになった。</li> <li>家から出ることがなくなった。</li> <li>外出する機会が減った</li> <li>自由な活動ができにくくなった。</li> <li>旅行などは減った</li> <li>安易に外出できなくなり、遊ぶ人や外食に行く人を選ぶようになった。友人とのコミュニケーションが減った。</li> <li>家に引きこもることが多くなった。</li> <li>サークルの活動が制限されたり、文化祭で飲食やゲストを呼ぶなど制限がかった。</li> <li>なんとなく行動範囲が狭まり、外出が減ったため辛い時期もあった。</li> <li>行動に制限がかり、思うように行動できないことが多かった。</li> <li>自粛する時間が長くなった</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>友人とご飯にいくのにためらったりした</li> <li>周りに濃厚接触者があられ、移動が制限された。</li> <li>感染者数が増加すると、外出するのが少し嫌になった。</li> <li>旅行に行けなかった</li> <li>ボランティア活動が中止になりできなくなった。</li> <li>帰省がしづらい状況になった。また都会に行きづらくなった。</li> <li>県外への外出が難しく、帰省の時期も考慮する必要があった。</li> <li>人と会うことに対して抵抗感を持つようになったり、外出することが躊躇われるようになった</li> <li>去年と変わらずほとんどを家の中で過ごすように心がけている。対面授業のための外出は仕方ないので、それ以外では極力人との接触を避けた行動を意識して、食事なども必ず自宅で取るようにしている。</li> <li>イベントへの参加や友人との会食など外出を控えることとなり、新たな刺激を得られるチャンスが減った。</li> <li>愛媛県外に出れなくなった。</li> <li>外出の自粛</li> <li>感染しないように気を遣うように行動した。</li> <li>日常生活においては基本的には変わりはなかったが、休日に友人と出かけたりする際に、人との接触を避ける必要があったり、県外に出ることをあきらめるなどのことはあった。</li> <li>濃厚接触者になった時、外出できないため、対面の授業を受けることが出来なかった。</li> <li>実家暮らしで姉弟が受験生なこともあり、濃厚接触すらしていませんともやや隔離に近い生活になっている</li> <li>行動制限自体はないが、風潮として動きづらいう部分が多かった。</li> </ol>
精神面での影響・不安 (15件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>学校としては特に何の変化もなかった故に不安を感じながら登校し続けたことは記憶に残っている。</li> <li>対面授業で新型コロナウイルスに感染してしまうかもしれないことが少し怖かった。</li> <li>ほとんど変わりはないが感染不安が少し増えた。</li> <li>対面授業で学生同士の距離を十分に取れない講義室内での受講に少し恐怖があった</li> <li>外に出ることに不安を覚えた。</li> <li>大学に行くのがこわかった</li> <li>少し、感染に対して不安を感じる。</li> <li>面倒さがあった</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>部活動の活動停止が継続的に繰り返され、モチベーションやクオリティの維持が困難であった。</li> <li>行動制限は無くなって行動が変わるわけではない。増加しても三津浜花火大会などちゃんと原因も分かっているの、いちいち生活を変えるのが馬鹿らしく思うようになった。</li> <li>コロナの感染者ばかりに気をとられて、その影でメンタル不調になっている人を置き去りにしているという非常に良くない状況が浮き彫りにされてきたのではないかと感じるようになりました。</li> <li>幾度となく部活動が止められたことは非常に精神的にダメージが大きかった。</li> <li>昨日同じ教室で授業を受けた人が感染した時は不安だった</li> <li>不安が増大した</li> <li>授業は対面で実施するのに、他の活動に制限かけるのはおかしい。ストレス。</li> </ol>
感染症対策 (4件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>より手洗いうがいを意識するようになった。また、一人暮らしの中ワクチンを打ってしんどい思いもした。</li> <li>通学で利用する公共機関や屋外での活動時により消毒を心がけた</li> <li>より感染対策を行った</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>よく感染対策を徹底するようになった。</li> </ol>
アルバイト (4件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>バイト先が臨時休業することがあり、シフトが減ることがあった。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>アルバイト先が暇になり、働く時間が少なくなった。短期バイトをすることで収入的には変わらないが安定したバイト代ではなくなったので、少し不安な気持ちもある。</li> <li>アルバイトの忙しさとそれに伴うストレスの変動。</li> <li>バイトに入れなかった。外出するのに親の目を気にしなければならなかった。</li> </ol>
マスクの着用 (3件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>マスクの着用の義務がづらい</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>マスクは嫌だかけないといけない、授業中につけたら眠くなりやすいけど仕方がない</li> <li>マスク着用を常時していたことが、煩わしく感じた</li> </ol>
その他 (3件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>特にないが自分自身がコロナになってしまった</li> <li>外に買い物に行くことが減ったので、お金がたまった。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>行動制限がなくなったため、昨年度よりはコロナを意識する機会は減った。</li> </ol>

新型コロナウイルス感染症による大学生活への影響：大学生はBeforeコロナに戻る事ができるのか？

最後に、「2022年の夏休みは、行動制限はありませんでしたが、このことによって、あなたの夏季休業期間での生活においてどのような影響がありましたか。自由にお書きください。」として夏季休業期間での影響について尋ねた。この結果、100件の回答があり、そのうちの3割以上に当たる36件は「影響がない・特にない」ことを示すものであり、前述の感染者増による影響とほぼ同じであった。それ以外の主な回答(64件)は表21に示される。任意での自由回答とはいえ、行動制限がないことによって外出の機会が増えたことや行動範囲が広がったことを述べる回答が最も多く、休業期間での楽しみや自由な時間が過ごせたこ

とに関する回答と合わせると100件中、46件に上る。その一方で、外出自粛や行動制限についての回答やその中でのストレスを感じている回答も2割弱程度寄せられている。なお、この設問の自由記述の回答数(「影響がない・特にない」を除く)でも、2回生以上の回答が1回生よりも多い。

### 3. 考察

#### 3.1 学修面

図6(授業形態についての考え)に示された通り、6割以上の学生が「遠隔も対面も問題なく受けられた」としており、半数以上の学生にとって2022年前期か

表21 夏季休業期間での生活における影響 (任意、自由記述、すべて原文ママ)

	学部1回生 (29/64 45.3%)	学部2回生以上 (35/64 54.7%)
外出・行動範囲の拡大 (35件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 周囲の目を気にせずに旅行に行くことができるようになった</li> <li>2. 友人と県外県内を問わず、たくさん出かけることができた</li> <li>3. 県外に行っていた幼馴染と外出できた。</li> <li>4. 旅行に行った</li> <li>5. 旅行に行けた</li> <li>6. 自動車学校に行くことができた</li> <li>7. 旅行に行く等時間の有効活用ができた。</li> <li>8. マスクを着用したままの生活は変わらないが、県外旅行なども行け、自由に過ごせた。</li> <li>9. 県外に行くことができた</li> <li>10. 自分のしたいことをする時間が増えた。(お出かけ等)</li> <li>11. 自由に外出することができた</li> <li>12. 旅行に行けた</li> <li>13. いろんな場所を旅して、いろんな人たちに出会えた</li> <li>14. 部活動がオフの時期はできるだけ今のうちにと遊ぶようにした。</li> <li>15. 県外に心置きなく出かけることができるようになった</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2020年以降の長期休みで県外に遊びに行くことがなかったので、いろんな場所に行けた</li> <li>2. たくさん旅行に行けた。</li> <li>3. 少し遠出したり、外出がしやすくなった。外に出て自分の目でいろいろな商品や景色を見ることで自分の価値観、考え方が広がったように感じる。</li> <li>4. 多くの友達と旅行に行ったり、遊んだりできた。</li> <li>5. 祖母と祖父には会いに行きました。</li> <li>6. 四国外へ旅行をした</li> <li>7. 夏休みは自由に行動していた。</li> <li>8. 帰省中家族と出掛けることが昨年よりも増えた。</li> <li>9. これまで感染対策のため、おこなえなかった帰省や平日に長時間友人と遊ぶなど大学生だからこそできる取り組みを行えました。</li> <li>10. 研修にたくさん行けた。</li> <li>11. 帰省できた</li> <li>12. 前年よりも旅行や帰省などをしやすかった</li> <li>13. 昨年より、行動範囲が広がりゼミでの演習や個人旅行をすることができた</li> <li>14. 外出できた</li> <li>15. 高校時代の友人に会うことができた。</li> <li>16. 学校のゼミ活動などで県外に出る機会もでき、活発的に活動できるようになった。</li> <li>17. 行動範囲が増えて日々の体調が良くなりました。</li> <li>18. 成人したので友達と気軽に飲めるようになった。</li> <li>19. ゼミ活動が活発に行えたほか、県外に住んでいる親戚に会いに行くことができ、2021年の夏休みとは格段に多くの経験をすることができ、学業にも良い影響があったと考える。</li> <li>20. 昨年の夏休みよりも人に会うことが多かった。そのため電車で移動する人が多いという印象があった。</li> </ol>
外出・行動の自粛や制限 (13件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 以前の夏休みよりも外にでる回数が減った。</li> <li>2. 感染予防に気を付けながら活動を自粛した。</li> <li>3. 帰省や県外への移動をためらった</li> <li>4. 部活動によって制限があったため、思うような行動ができなかった。</li> <li>5. ほぼ家こいた</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 夏休み中田舎外まで出なかった</li> <li>2. 昨年と変わらず、あまり外出をしなかった。</li> <li>3. それでも親は行動制限をかけてくるので予定していた旅行には行けなかった。</li> <li>4. 夏休み中に予定されていた東京のライブに行けなかった、ライブが中止になった。楽しみが減った。</li> <li>5. 外出の自粛</li> <li>6. 親に遊びに行くことを止められた。</li> <li>7. 行動自体は制限されていなかったが、サークル活動など、活動したくてもできない時期があった</li> <li>8. 夏休みの期間は実家へ帰省したが、今年は対面授業があったため2週間ほど現在の下宿先で待機した後、公共交通機関の利用を避けて帰省した。</li> </ol>
楽しみ・充実感・ストレスの低下 (9件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. これまで以上に充実した夏休みを過ごすことができた。</li> <li>2. たのしかった</li> <li>3. 自由に楽しめたと思う</li> <li>4. 有意義に時間を過ごすことができた。</li> <li>5. 夏季休業期間を楽しむことができた。</li> <li>6. 今まで制限があったために、外で何かをすることに罪悪感を感じていたがそのような罪悪感も減り、ストレスも減った。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 県外に行くのは部活動の関係で憚られたが、昨年よりはそれなりに楽しむことができた。</li> <li>2. 昨年より楽しめた</li> <li>3. 友人と会ったり帰省をし、去年よりもずっと楽しく過ごせた。</li> </ol>
自由な時間 (2件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 比較的自由的な時間を過ごせた。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. やりたいことが自由にできた。</li> </ol>
感染症対策 (3件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 集中講義の話し合いをする際に感染対策を気をつけたり、抗原検査をしなければならなかったりするのが大変だった。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 行動制限はなくとも、常に感染予防をおこなっていた</li> <li>2. 比較的自由的な時間を過ごすことができた一方、濃厚接触者になったときの自己責任も大きく、精神的に厳しかったといえる。</li> </ol>
その他 (2件)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. わからない</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 今まで制限かけといて、その生活が急に変わるわけがない。変わったとしても、それは行動制限解除ではなく、学年が上がったことによる影響でしかない。</li> </ol>

らの原則対面となった前学期での受講に著しい問題はなかったものと考えられる。原則対面授業になったことによって、受講生同士や教員とのコミュニケーションが増え、生活のリズムやメリハリが生まれたことが認識される場合が多く、ある程度本来の学生生活に近い環境が戻ってきたことも想像される。その一方で、自宅から遠隔授業を受けていた場合には発生しなかった通学のための移動負担や1日に遠隔と対面授業が混在することによってスケジュール調整が複雑になったことも多くの学生から認識されている。遠隔授業であれば、自宅で家事やプライベートな活動を授業の前後に行っていたとしてもすぐに講義にシフトできる環境であり、特に同期型の遠隔授業もない場合には終日別の予定を入れることを想定したスケジュールも可能であったため、そのような利便性がすでにコロナ禍の中で認識され、それに合わせた生活スタイルが確立されていたのかもしれない。

また、対面授業でも遠隔授業でも問題なく受講できたという回答者がマジョリティであるものの、興味深い点として、全体として「遠隔で授業を受けるのは良く、対面がつかった」が18.5%、授業の理解度についても27.0%の回答者が遠隔のほうが良いと回答しており、コロナ禍以前とは異なる意識をもつ回答者がいることも観察される。遠隔授業の何が評価されているのかについては、「遠隔授業になって良かったこと」にあげられるオンデマンド性や通学のための移動負担がないことがその主な理由と考えられる<sup>8</sup>。これらの点は、「原則対面授業になって困ったこと」として挙げられた「資料や動画を繰り返し見ることができなくなり、勉強や復習がしにくくなった」という回答が3割以上の回答者から選択されたこととも矛盾せず、動画や資料による遠隔授業のオンデマンド性のメリットが学生にある程度理解されていることの裏返しであるともいえる。1回生であっても非同期型授業科目を同時期に履修していれば、自分のペースで動画の再生や資料の閲覧状況等を自由に調整できる非同期型のメリットが評価され、すでにその受講形態に慣れてきているとも考えられる。そのために、非同期型に比して対面での授業は講義時間を長く感じてしまい、このような意味においては、原則対面となった現在においても、「Before コロナ」に戻れない状態に意識や受講姿勢が変容しているとも捉えられる。

しかしその一方で、遠隔でかつ非同期型授業の特徴であるオンデマンド性が、「いつでも受講できるのであれば、すぐにやらなければいけないわけではない」という怠惰な気持ちを誘発する要因と表裏一体であることも推察される。「遠隔授業になって困ったこと」の回答として二番目に挙げられていた「非同期の

講義はいつでも受講できるため後回しになり、やる気が起きなかった」という選択肢も3割以上の回答者から選択されており、受講生によっては非同期型授業のオンデマンド性がモチベーションを低下させたり、非同期型授業を受講したり、課題に取り組むスケジュールの管理をルーズにさせたりする要因となっている可能性がある。また、同期型授業であっても、物理的な空間を共有しないことから授業に集中することが困難となっていること、あるいはあえてそれを選んでいるケースがあることも想像される。図6、図7が示すように、上記のような遠隔授業の特徴によって、一定数の学生が対面よりも遠隔の授業を好みながらも、「必ずしも理解度が高まるとは思っていない」という感覚を有している場合もあろう。これらのことは、今後、ハイブリッド型の授業形態のメリットを生かしていく上でも留意が必要な点であると思われる。

### 3.2 課外活動、生活面での変化

課外活動については、原則対面となったことによる行動範囲が広がり、人と会う機会が増えたことによる楽しみが広がったことを述べる回答が多く、経済的な影響についてもあまり変化がないという回答者がマジョリティであった。表19～21に示される自由記述の回答においても、行動制限がなくなったことによるポジティブな影響が多く回答され、夏季休業期間中に帰省や旅行、友人との交流などそれぞれの楽しみを見つけて過ごしたという回答が多い。しかしながら、原則対面となり、行動制限がなくなったとしても、2022年夏頃には第7波と呼ばれる新型コロナウイルス感染者数の増加がみられ、この時期についての自由記述では新型コロナウイルス感染症に対する不安を抱え、外出を自粛したという回答がほとんどである(表20)。

このように、2022年前期以降において、生活面に關しても学生にとってのポジティブな影響や変化がみられるものの、引き続き行動を制限し、感染症対策に気を引き締めて過ごしている学生も多く、特に対人関係については、交流の機会が増えたとしてもむしろそれを煩わしいものと捉えている回答者もみられる。

加えて、メンタルヘルスに関しても、8割以上の回答者は専門機関に相談するほどの問題を感じずに過ごしていると思われる一方で、実際に受診した、あるいは受診を考えた回答者も1割程度存在し、この状況が新型コロナウイルス感染症が流行する以前とどの程度異なるのかについても検討が必要であろう。

### 3.3 学年による差異

1回生の回答率が有意に高かったものには、学修面



においては「原則対面授業になって困ったこと」の「1日にオンラインと対面の講義が混在するため、受講環境やスケジュールの調整が難しくなった」、「毎日、通学することが体力的にしんどい」、「遠隔授業での障害」における「Moodleなどの操作方法がわからなかった」があげられる。これらの背景としては、入学から間もなく、大学生活に慣れていないために、その問題がより強く認識されているものとも考えられる。また、興味深い点として、全体的な授業の理解度（表14）において「遠隔」が良いとした比率は1回生がより高く、その背景についても検討が必要であろう。学修面以外では、「学内（外）で知人・友人が増えた」、「新たにアルバイトを始めた」とする回答比率も有意に高く、入学後に大学での新しい生活や人間関係が生まれていることが予想される。

他方、2回生以上について、「原則対面授業になって良かったこと」では「課題の提出頻度が少なく、課題の提出期限や進捗を自己管理する負担が減った」、「教員の顔・表情・声が分かり、教員に親近感ももてた」が、「原則対面授業になって困ったこと」では「移動に時間がかかり、面倒に感じる」、「資料や動画を繰り返しみることができなくなり、勉強や復習がしにくくなった」において1回生よりも有意に高い結果となった。また、遠隔よりも対面授業での理解度が高いと回答する傾向が示されている（表14）。これらの点について、2回生以上の学生は大学で遠隔授業を受けた期間が長いために、上記の点がより強く感じられており、非同期型授業のオンデマンド性のメリットも2回生以上の学生により認識されている可能性がある。

しかしながら、「メンタルヘルスへの変化」での「疲れた感じがした、または気力がなかった」、「原則対面授業になって困ったこと」での「大学にあまり友人、知人が多くないため、孤独を感じる」において有意差がみられ、2回生以上の回答者がそれをより選択する傾向にあることが示された。加えて、自由記述（表19）においても2回生以上の回答者にネガティブな回答がやや多くみられる。新型コロナウイルス感染症の流行が始まった2020年度から新入生となった3回生の回答者や、ゼミナールやフィールドワークなどの活動が盛んに行われるはずの学年においてそれが遠隔授業に置き換わった経験をもつ回答者にとって、原則対面となったとしてもコロナ禍によって失われた機会や活動を控えてきた時間の経過による影響は今も続いているようにも思われる。このようなコロナ禍における対人コミュニケーション機会の喪失による影響という意味においても、Beforeコロナと同様とは言えないのかもしれない。

#### 4. おわりに

本研究では、2022年11月に愛媛大学社会共創学部学生を対象に実施したアンケート調査結果に基づき、原則対面授業となった2022年前期での学修状況や生活、メンタルヘルスなどに関する意識について検討してきた。本調査の対象となった回答件数は326件と学部学生の4割程度のみに限られており、1回生の回答が多いために偏りも大きく、社会共創学部全体の学生の状況を完全に描写しているわけではない。しかしながら、本調査結果から、実際の大学での学修状況や生活の変化がどのような傾向にあるのかをうかがい知ることができ、考察で述べた点は、今後の大学教育やハイブリッド型の授業形態を検討する上でも有用であると思われる。

今後の研究課題として、本調査結果と同時期に実施された法文学部での調査結果（青木ら、2023）と定量・定性的に比較・分析することによって、愛媛大学の文系・文理融合学部全体での傾向や各学部での特徴を把握することがあげられる。その際には、性別や通学時間といった属性による差異や、対面よりも遠隔を好む学生の志向性、特徴といった観点からの分析によって明らかになることがあるかもしれない。また、特に地域をフィールドとする社会共創学部のように、実習や演習を重視する学部においては、コロナ禍の中で現場での体験やフィールドワークの活動が制限された可能性が高く、そこでの対応状況や学生の意識変化などについても定性データを含めて深く分析する必要がある。

#### 謝辞

本研究は、令和4年度愛媛大学社会共創学部学部長裁量プロジェクト「社会共創学部における教育・研究に対する新型コロナウイルスの影響」（代表：崔英靖）における研究活動の一環として実施されました。

また、本アンケート調査にご回答くださったすべての皆様に心から御礼申し上げます。特に、アンケート票の作成あるいは回答依頼にご協力くださった下記の皆様には大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

愛媛大学 社会共創学部 園田雅江先生、尾花忠夫先生をはじめとする産業マネジメント学科の先生方、産業イノベーション学科 福垣内暁先生、環境デザイン学科 渡邊敬逸先生、社会共創学部学務チームの皆様、法文学部 鈴木静先生、青木理奈様、鈴木榛夏様、人文社会科学研究科 吉見花奈様

## 注

- 1 愛媛大学における新型コロナウイルス感染症への対応状況は青木ら（2022）p.20.にまとめられている。
- 2 同時期に、愛媛大学法文学部でも同様のアンケート調査が行われており、その結果は青木ら（2023）を参照されたい。なお、本アンケート調査項目は、青木ら（2021；2022）と一部同様の質問項目を設定している。
- 3 社会共創学部の学部学生の在籍学生数は、2022年5月の時点で768名であり（愛媛大学、2022）、本アンケートの学部学生回答者324名は全体の42.2%である。
- 4 表2のデータは、愛媛大学教育支援課社会共創学部チームによる提供資料に基づき、同一科目は統合して集計している。基本的に対面授業を行うことが前提とされる一方、履修者数が多く、教室定員の関係からソーシャルディスタンスを十分に確保できない場合や対面授業が実施困難な非常勤講師担当科目についてのみ、遠隔授業の実施が認められている。
- 5 Moodleとは、愛媛大学で利用されるラーニングマネジメントシステムであり、資料や動画のアップロード、課題の提出などを行うことができる。
- 6 以下同様に、カイ二乗検定を行い、度数が少ない場合にはイエーツの補正を加えており、表中の\*\*は1%水準、\*は5%水準での有意差があったことを示している。
- 7 就職活動への影響については対象となる学年が限られるため、学年別の分析は行っていない。
- 8 これらの点は、青木ら（2021；2022）、Murata and Orito（2022）における調査結果とも同様である。

## 参考文献

- 青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉（2021）「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ—学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果」愛媛大学法文学部論集社会科学編（50）pp.37-68.
- 青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉、池貞姫、十河宏行、中川未来（2022）「学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ—2021年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果—」愛媛大学法文学部論集社会科学編（52）pp.19-54.
- 青木理奈、鈴木静、福井秀樹、小佐井良太、石坂晋哉、太田響子、池貞姫、十河宏行、中川未来（2023）「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅶ—2022年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果—」愛媛大学法文学部論集社会科学編（54）pp.97-134.

- 赤間道夫（2022）「コロナ禍が大学生の就職に及ぼす影響について—愛媛大学の就職状況の分析を通して—」愛媛経済論集, vol.41, no.2-3, pp.1-16.
- 飯田昭人、水野君平、入江智也、川崎直樹、斉藤美香、西村貴之（2021）「新型コロナウイルス感染拡大状況における遠隔授業環境や経済的負担感と大学生の精神的健康の関連」心理学研究 92（5）pp.367-373.
- 愛媛大学（2022）「愛媛大学について 統計情報」<https://www.ehime-u.ac.jp/about/statistics/>（2022年11月21日アクセス）
- 岡本隆、園田雅江、曾我亘由、深堀秀史、福垣内暁、埜康介（2022）「コロナ禍のインターンシップが社会人基礎力自己評価に及ぼす影響」経営情報学会 全国研究発表大会要旨集 2021年11月 pp.397-400.
- 折戸洋子、村田潔、石丸聡一郎、大原千晶、小野新、川端美裕、岸諄、木村元紀、庄司遼太郎、角直輝、鶴田尚、鳴尾空海、西岡太一、山口英里（2021）「COVID-19はどのように報じられたのか?：2020年1月から5月における新聞記事調査」Journal of Ehime Management Society Vol.4 pp.59-68.
- 折戸洋子、石丸聡一郎、小野新、岸諄、角直輝、西岡太一、山口英里（2021）「COVID-19は学生の健康意識をどのように変えたのか?：学生に対するアンケート調査および大学教員に対するインタビュー調査」Journal of Ehime Management Society vol.4 pp.45-57.
- 梶谷康介、土本利架子（2021）「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミックが大学生のメンタルヘルスに及ぼす影響：文献および臨床経験からの考察」健康科学 43 pp.1-13. <https://doi.org/10.15017/4372005>
- 澤田忠幸、新村知子、高橋千秋、坂上千種（2021）「学生健康調査から見る学生のメンタルヘルス—コロナ禍での学生サポートの一助として—」石川県立大学研究紀要 4 pp.83-90.
- 除村健俊、小林真也、飯尾淳、井上雅裕（2022）「オンライン授業の現状と将来—大学教員から見たCOVID-19による授業の変化と学生への影響—」プロジェクトマネジメント研究報告 2（1）pp.16-23.
- 細川裕子（2021）「女子短期大学生における新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に対する意識と自粛期間中の生活スタイルの変化」目白大学短期大学部研究紀要（57）pp.31-39.
- 山根真紀、大宮ともこ、石井智也、住田健（2021）「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大における学生の健康及び生活に関する調査報告」日本福祉大学スポーツ科学論集 4 pp.65-73.
- Murata, K, and Orito, Y. (2022) Student experiences during the COVID-19 pandemic: the case of Japanese higher education, In Ana María Lara Palma and Rafael

新型コロナウイルス感染症による大学生活への影響：大学生はBeforeコロナに戻ることができるのか？

Brotóns Cano (eds.), *International Education Narratives: Transdisciplinary Educative Innovation Experiences Based on Bilingual Teaching*, Universidad de Burgos, pp.142-156, <https://doi.org/10.36443/9788418465345>